



小さな古扉

商学部教授 辻 和夫

さながら流亡と荒廃のなかの青春であった。私の内には安んじて根を下せる場所は乏しかった。親がかりの頃には、生の断念に向って内面の破壊が続き、思いこみの純粹さだけが善美に思われて、心の内を見つめることなど詮もないことであった。敗戦も未だ生活の重荷をおしかぶせただけで、解放の思いには間遠かった。学校はたゞ籍を置くにすぎず、飢えた体は口に入るものを探してうろつき、虚ろな心に残る僅かの精気も、モノに吸い尽くされそうであった。自己形成のヤマ場でのこの異様さが、生来の雑駁な性をさらにスポイルしてきた気がする。だがそれはそれとして、やがて時に流され、人後について、非自主的な精神のアク落しが私にも人並みに始まるのだが、このスタートがまたはなはだ恰好の悪いものであった。

日本に引揚げるまでの2年近く、旧満鉄系船渠工場の取付工見習いとして、ソ連船修理の賃労働で糊口をしのいだ時のこと、ついその直前まで見下しきってきた中国人の、しかも下層労働者の、そのまた下に落ちこんだ自分の惨めな現実を受容するには、いいようもなく無残な苦

渋の時間をかなり経験しなければならなかった。また同じ職工仲間には、かつて労働運動や非法政治活動に関り大陸に逃れ移ってきたような人もいた。その1人と夜業の休み時に国家体制をいい争い、知性も教養も自分に及ぶまいとタカを括っていた人物に、私はもの見事に打ちめされた。街頭に並ぶ同胞の素人露天商が手押車に積み上げていた古書のなかから、やみくもに改造文庫版のディツゲン「マルキシズム認識論」とボグダノフ「経済科学概論」の2冊を買求め、初めて見参する概念や論述の難解さに辟易しながらページをめくりだしたのは、そうしたことがあってからである。おくればせにやっと知の世界へ私を誘った扉は小さかったが、それなりに新鮮な空気を私の内側に呼び入れ、開かれる扉の数がつけ加わるにつれ、五里霧中の私にも少しずつ視界がひらけていった。

月日の隔りを想う時、表紙の変色した2冊の文庫本が、私の記憶の仄暗い片隅にいつも動かずにいる。

(つじ かずお：交通論)

Contents

小さな古扉	辻 教授	1	パリ経由・夢の国行	6
読書の効用	小杉助教授	2	工藤クララ	
卒業後も図書館へ	最上賢治氏	3	気楽に読める専門書<3>	7
図書館ですごした日々		4・5	平野教授	
4年生4名			お知らせ・ニュース	8

読書の効用 — 卒業生へ贈る —

法学部助教授 小杉茂雄

小生、元来がテレビ人間、かつ、ながら族でありまして、仕事の(論文を書いている)ときも多くは、テレビがかかっております(もっとも、その内容はほとんど頭に入ってはこないのですが)。以前、広報にも書かせていただいたと思うのですが、小生の大学生の時代は、読書とは殆ど縁のない生活を過ごしておりました。それが度重なる入院生活の御蔭で(?)、今ではトイレにゆくときも文庫本を持って入るという、妻・子いわく癖の悪い読書人になってしまいました。そのことはともかくとして、では、なぜそんなに寸刻を惜しんで本を読むのかといいますと、その答えは簡単明瞭でありまして、面白いからなのです(どのように面白いのかは、個人の好みの問題でありますから申し上げることはできません)。もちろん、すべての本が面白いとはいえないと思います。少し読みかけて、止めてしまった本も、当初は少なからずありましたが、ムダ金、ムダな時間を費やしたおかげで、最近ではうまくセレクト出来るようになってまいりました。昭和56年4月に本学へ赴任させていただく以前には、今のように文庫本が主流ではなくて、職業柄(?)週刊漫画アクション、週刊ポスト、週刊現代が必読・愛読の書で、毎週欠かさず買って通勤の行き帰りの電車のなかで、寝るか読むか致しておりました。その中で

は、「じゃりん子チエ」、「博多っ子純情」、「花の応援団」、「頑張れタブチくん」、黒鉄ヒロシのナンセンス漫画や宇能鴻一郎の「濡れて…」、『私…いきなり…されちゃったんです…』という類いの連載小説が好きでありました。(本原稿の趣旨—「社会人になっても読書を続けてほしい」—から外れてまいりましたが、書き続けます。)一週間に600円以上の出費を顧みず3年以上も欠かさず買い続けたのですが、とうとう飽きて参りまして、清貧の生活に甘んじなければならぬ学者の生活に入るのを機に、購読を止めました。そして、メインではなかった文庫本の読書癖が残ることとなったのです。とりわけ、文庫本の時代小説・歴史物は、飽きることなく面白いのです。病气入院という人生における無駄が読書の面白さを教えてくれ、くだらないともムダとも言われうる(小生はくだらないとは思っていませんが)週刊誌が小説の面白さを教えてくれたように思われます。その結果として、人生におけるムダの効用を信奉いたしております。まったく取り留めがなくなりました。ええい!ままよ。開き直って、角川文庫、飯干晃一「会津の小鉄^①_②」が面白かったですよ、ということで筆をおかせていただきます。

(こすぎ しげお:民法)



卒業後も 図書館へ

通産省 福岡通産局

最上賢治

月日の流れは早いもので、卒業して5年目の春を迎えようとしています。

私と図書館との出会いは国家試験の勉強を始めた大学1年の秋頃からであり、卒業後も仕事が比較的早く終る土曜日を中心に利用させて頂いております。

私のように仕事をもっている人間にとって、卒業後も夜9時まで利用出来るということは誠に有難いもので、短い時間ではありますが、質の高い勉強が可能となります。

確かに、働きながら勉強を続けることは、学生の時に比べて2～3倍の苦労はあります。

しかし、それだけに目標を達成した後の喜びにはひとしおのものがあるのではないのでしょうか。

私も役所に入って2年目に、努力の結果、上級の資格を得ることが出来ました。大学に入ってからまた、社会人となってからも困難な勉強をする必要はないという考えが今の若者は多いと思いますが、努力をすれば必ずや報われるというのが、今の私の実感です。ですから、在学生の皆さんはもちろんのこと、これから就職される方で国家試験等を目指される方は、図書館を有効に利用されることをお勧めします。

以上のように、私も図書館には10年近くお世

話になっているわけですが、今後図書館の更に有効な利用を図るために、個人的には以下のようなことをお願いしたいと思っています。

第一に、閉館時間の延長です。

現在、夜9時の閉館時間を例えば、あと30分でも延長して頂ければ、利用価値が更に高まるのではないかと思います。経費面の問題はありますが、西南会館が9時30分に閉館している(休暇期間等は別ですね。)実態からしても、延長の実現が期待されるところです。

第二に、図書館を利用される方をお願いなのですが、試験中はもちろんのこと、それ以外の時においても、時々、私語が多いと感じることがありますので、他人に迷惑をかけるような私語は大人として慎みたいものです。質問等がある時には休息室が設けられているのですから。私が在学中の頃は、図書館の長老みたいな方がよく注意されていたようですが、自分がそういう立場になっても、気が弱い私としては周りから白い目で見られるのではないかと、注意をするのに抵抗を感じますね。

以上、とりとめもないことを書いてしまいましたが、今後の図書館ひいては本学の益々の御発展を祈念致しまして、ペンを置きます。

(もがみ けんじ：昭和58年 法学部卒業)



図書館で すご

経済学部4年 野口 修

私が本学の図書館を利用させていただいて4年が過ぎようとしている。思えば長くても短かくもあったが、大学生活の大半をここで過ごしたことは望外の仕合せで感謝している。

大きくて明るく、蔵書も豊富にそろえてあり静かにたもたれている。学習の場、精神鍛練の場として最適である。

私の学生時代の読書量というものとは決して多くはないが、本館の利用回数は誰にも劣らないであろう。とにかく毎日登っていった、そしてこのことを習慣づけようと思った。自分に入館する事が大切だと言いつけて。

図書館には、二つの出会いがあった。一つは文献であり、もう一つは人である。私は様々な人と会い議論する人を見つけに毎日通った気もする。議論するためには知識が必要だから本を読むとといったことが私には最終的に良かったのである。このように図書館には、本を読むだけでなく自分が人間性、知識において学ぶべき人材がいるということである。

先輩の皆さんも、学問的態度と創造的精神とを訓練する場として積極的に利用することをおすすめします。大学教育にプログラムされたものだけでなく、人間社会・文化等の様々な分野に興味を持たれんことを望みます。知識は力なりといひます。学問的態度を作ることを大学生活の一つのテーマとして、真に意義あるものにして下さい。

(のぐち おさむ：経済学科)

法学部4年 丹 寛子

図書館の階段をかけ上がり、ピンクの紙を受け取って2階の閲覧室の扉を押す。取りあえず新着図書の棚に目を走らせる、目ばしいものはないかなと……あった、読みたかったんだ、これ。さっそく席を探す。が、忘れてた、今日はレポートを書きに来たんだ。泣く泣く読みかけた本を閉じ、忍の一字で4階へ。さすがにお堅いと言われる法律の専門書たちはつんと澄まして整然と並んでいる。一見静かに見えるが実生活と深く関る内容を持つだけに、中々一筋縄ではいかない奴らなのだ。ずらっと並ぶ彼らになめられてなるものかこちらも必死に平静を装い、参考になりそうなのを数冊引き抜く。久々に〈学生本来の姿〉を自分に感じつつ、机の上での悪戦苦闘は数時間に及ぶ。気が付くと窓の外はもう闇で、戦いはまだ終わりそうにない。しぶとく抱え込んでいた新刊と再会を約して別れ、レポートのための本2冊をなだめすかして連れて帰ることにする。図書館ではいつもハラハラ、ドキドキ、知的興奮と言うのかな、本達に自分が試されているようで。

1階ロビーの主である大時計にさよならを言って、図書館を出た。

(たん ひろこ：法律学科)



した日々

文学部4年 佐藤由美子

アメリカの、1日24時間開いている某大学図書館に憧れ、本屋の閉店後には行き場を失くしてしまっていた私にとって、この図書館の午後9時という閉館時間は、とても画期的なものでした。初めて図書館の入口でその表示を見た時、驚きのあまり9と6の間違いじゃないかと疑ったくらいです。

ようし、第二の書齋にしよう!と思い立って早や4年、意気ごんだ割には芳しくない学業成績で、後はもう一ヵ月後の卒業式を待つばかりの身となりました。今、図書館でこの原稿を書きながらいろんな事を思い出しています。普段は言葉を交わす事もなかったクラスメートと親しくなったり、冗談ばかりとぼしている友人が熱心な読書家だと知って意気投合したのも図書館での思い出です。雑誌コーナーでは雑誌を読み耽り、手つかずの宿題を持ち帰ったことや、居心地の良さについて居眠りをして、気がついたら外は真暗ということもしばしばありました。

しかし、この図書館とも、もうすぐ——、なんて悲しんではいません。手続きをすれば、卒業後も特別利用者になれる事を、夕方から来館される卒業生の方達の姿を見て知っていたからなんです。午後9時の閉館時間が幸いして、まだまだ私とこの図書館の縁は続きそうです。

(さとう ゆみこ：児童教育学科)

文学部4年 穴見 洋一

題目のニュアンスほど私の図書館がよいは意識的なものではなかったように思います。入学当初は、図書館に行けば賢くなれる、そんな浅知な思いもあったのですが、4年間で印象に残っていることはいくつかのことです。

一つは、ゼミの先輩に文献の探し方を教わったことです。先輩を誘って3階閲覧室にやって来て、目当ての本に巡り会えた時の喜びは言葉にし難いものがあります。

二つは、昨年、恩師長洋一先生に閉架図書室案内をしていただいたことです。日頃、私たち一般学生には間接的にしか見ることが出来ない図書—歴史書に限ってみても、「けっこうあるな!」というのが実感でした。

三つは、ある日、2階カウンターで「今日は返却だけです。」と言って学生証も提示せず奥へスーッと進んで行くと、私が何も言わない先に司書の方から私の名前を呼ばれ、続けて「学籍番号は87-40??だったかな。」と言われるのです。帰り道で「どうして私の名前を?」とふと思いついて返して、嬉しく思ったことがあります。

図書館には本を探しに行くことの方が多かったように思いますが、難解な専門書を耽読したというより、一冊の本を巡って、ある時はゼミの先生、また先輩、そして司書の方との触れ合いの中で、今まで知らなかったことを知る営みを感じ取ったように思います。

(あなみ よういち：国際文化学科)



經由 ☆夢の国行

工藤 クララ

……パリ經由、夢の国行き523便に
ご搭乗のお客は3番ゲート
へお急ぎ下さい。……

“どれ位眠ったかしら……機内のアナウンスは
陽気な”スパニッシュじゃなくて、甘いささや
きのフランス語。

やっと来た!!来た!! バンザーイ!!

モネ、ピサロ、ドガ——大好きな印象派の画
家達をはじめ、ロートレックやユトリロやシャ
ガール、数え上げればきりが無い程の画家に、
愛され、『描かれたパリ』どこに行こうかな。

“ミラボー橋の下をセーヌ河が流れ

われらの恋が流れる

わたしは思い出す

悩みのあとには楽しみが来ると”

アポリネール「ミラボー橋」(堀口大学訳)

地図でみた通り……セーヌ河が流れてる。

白く浮びあがるのは、ユトリロの愛した

サクレ・クール寺院 モンマルトル

ピカソ・ブラック・アポリネールなどが常連だった

ラパン・アジル

ルノワールやロートレックが好きだったのは

ムーラン・ド・ギャレット

エコール・ド・パリと呼ばれた画家達がいた

モンパルナス

そういえば、レオナルド・フジタ展は、もう
終わったかな……。

サンジェルマン・デ・プレ

ノートルダム寺院 凱施門

エッフェル塔 シャンゼリゼ

ルーヴル美術館

でも印象派美術館の方がステキ

クリニャン・クールの蛋の市

お土産には **エルメスのスカーフ** (な
んて買ってきてくれる友達が欲しい。)

と……エッ!? あら!?…… あれれ……
目の前を歩いていくのは……プー・コブタ・イ
ーヨー・トラー 皆、口々に呪文をと覚えて
る“フット・ワーク” “フット・ワーク”
目が覚めた私が出たのは図書館。机の上には、
数冊の本 ——夢だったんだ。

なんて、著作権のことを気にしながらも、書
いてみました。私の空想旅行。古くて汚い本も
多いけど、魅力のつまった本もたくさんありま
す。図書館の中を散策しながら空想の旅、ある
いは、本当の旅のプランをたてるのも楽しいも
のです。解らないことがあったら気軽にカウン
ターで尋ねてください。きっとお役に立てると思
います。 ………そう願いつつ。

(附録) 独断と偏見で勧めさせて頂くなら…

『描かれたパリ』 723・5・68

『ユトリロと古きよきパリ』 C・7I・1

『パリ印象派美術館』 723・5・82

『バルビゾンの画家たち』 723・5・70

3階入口側の大型美術本

絵本のコーナー (プーもあります。)

「るるぶ」 「旅」 (2階)

「ELLE」 (4階)

日本の各都道府県の地図や

ホテル案内もあります。

もうスペースが足りない!!

(くどう くらら：情報サービス課閲覧係)

気楽に読める専門書〈3〉

体系的な「アメリカの軍事戦略」への入門書

文学部国際文科学科主任 平野 正

「専門書」というものが、対象を科学的・専門的に探求し、論証・論述したものだとするならば、「気楽に読める」ものだろうかということが疑問となる。しかし読み手の側の興味の深さや対象への没入の深さによっては、いかに難解な「専門書」といっても、興味深く読めることはある。興味深く読めるかどうか（「気楽に」ではない）は、ひとえに読み手の側の興味の強さと関心の深さによるであろう。

そのようなものの一つとして、アメリカの軍事専門家マイケル・クレアの書いた『ベトナム症候群を超えて』（合同出版 1985年）を紹介しよう。著者は1969年ベトナム戦争をとりあつかった論文（「大南アジア戦争」）で一躍、軍事評論家としての声価を高め、以後、アメリカ民主勢力のシンクタンクIPS（政策研究所）の一員として、アメリカの軍事・外交政策の研究にたずさわっている新進気鋭の軍事評論家である。

クレアによるこの著書は、ベトナム戦争敗北後、アメリカ国内に他国への軍事的干渉・介入政策に反対し、平和を求める世論——著者はこれを「ベトナム・シンドローム」という——が生まれたのに対抗して、1970年代末から、アメリカ支配層の中に世界においてアメリカが“指導的役割”を果し、アメリカの“死活的權益”を守るという欲望が強まり、80年の大統領選挙はその結果としてレーガン政権を生み出し、レーガン政権のもとで、数かずの軍事的干渉・介入政策が実施されて来た道筋を明らかにしてい

るのである。

レーガンは大統領就任直後から、「座視したまま手をこまねいて、この西半球を外部勢力によって侵略されたままにしておくことを許さない」との態度のもとに、エルサルバドルに軍事介入して、「ベトナム症候群」に対して逆襲に転じ、「わが国は世界の警察官の役割を果す」ことを意図して、第三世界の不安定さに積極的に干渉し、介入して行くこととなるのである。それはこの地域の市場や原料資源（石油や鉱物資源）への依存が西側経済にとって死活的な意味をもって来たことに起因している。そしてその課題を担うものとして提起されたのが、カーター・ドクトリンの発展であり、ブラウン・ドクトリン、ヘイグ・ドクトリンであり、民族解放運動を粉砕するための対ゲリラ戦ドクトリンであり、緊急展開軍の増強である。1980年代に入って以後のこれらの軍事戦略は、1986年1月に至って「低水準戦争」として体系づけられ、80年代後半のアメリカの世界戦略の最大の課題として明らかにされることとなったのである。マイケル・クレアの著書はこのようなベトナム戦争以後のアメリカの軍事戦略の展開の過程を、系統的に明らかにしてくれるものである。この著者には、このほかに邦訳『アメリカの軍事戦略』（サイマル出版会 1975年）がある。「気楽に読める」ものとはいえないが、「興味深く読む」ことのできるものである。

（ひらの ただし：文学部教授・中国近代史）

お知らせ

○春休み中の開館

2月6日(金)～4月10日(金)

9:00～21:00 ※この間、学習室は閉室

○春休み長期貸出し

1月27日(火)～4月22日(水)

(但し、卒業予定者は2月末日まで)

対象および冊数	学部学生	} 5冊以内
	専攻科生	
	留学生別科生	10冊以内
	大学院生	20冊以内

○卒業後の図書館利用の手続き

本学の卒業生は、図書館を利用できます。
利用希望者は手続きに次のものがが必要です。

- ① 特別利用許可願(本館備付) 1通
- ② 卒業証明書 1通
- ③ 証明書用写真(3×4cm) 1葉
- ④ 印鑑
- ⑤ 利用料金(1ヵ月) 100円

※入館、貸出し手続きは在学中と変わりませんが、貸出し冊数および期間は年間(休暇中を含め)を通じて3冊、11日以内です。

☆ 報 告 ☆

〈図書館委員会〉

61.11.20 ① 昭和62年度図書館予算の申請について

② 本学卒業生の図書館利用について 他

61.12.18 ① 昭和62年度継続購入雑誌について 他

62.2.26 ① 昭和62年度私大助成の申請について

② 学術雑誌の新規購入について 他

〈研修・出張〉

- 昭和61年度大学図書館職員講習会
61.11.17～20 於：京都大学

小嶋司書出席

- 第7回大学図書館研究集会
61.11.21,22 於：東京都立大学
杉野司書出席

- 昭和61年度福岡県・佐賀県大学図書館協議会 福岡地区研究会
62.1.21 於：福岡大学
今永課長、倉光係長、丸田司書補出席

- 第2回学術情報センター・シンポジウム
62.2.26 於：名古屋大学
品川司書出席

- 図書館電算化見学・研修
62.2.25,26 於：東京学芸大学、創価大学
荒川係長、杉野司書出席

〈本学開催の会議等〉

- 第18回国連寄託図書館会議
61.11.13,14 於：本館3階中会議室

国内における国連寄託図書館(12館)と関連機関より関係者が集まって、図書館が相互に有機的の連係を確保して、図書館活動の向上発展に寄与することを目的に年1回開催されている。この第18回の会議が上記の2日間、13館より20名の出席者を得て本学において開催された。

- 第1回九州EC研究会
62.1.31 於：本館3階中会議室
本学は、1969年にEC(欧州共同体)より、EC資料センターに指定され、以降年々ECが発行する資料(英語)が送られてきている。これらの資料の有効利用を旨として標記研究会が九州、山口の大学の研究者を中心に結成され、去る1月31日に設立総会をかねて第1回の研究会が開催された。(事務局：本学EC資料センター)